The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	志賀直哉『十一月三日午後の事』をめぐって : 他者へのまなざし
Author(s)	モインウッディン, モハッマド
Citation	日本研究論集. 2010, 2, p. 144-165
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89298
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

志賀直哉『十一月三日午後の事』をめぐって
――他者へのまなざし――

モハッマド・モインウッディン　大阪大学文学研究科　D2

1.はじめに

ある時期までの志賀直哉にとっては、父に抵抗して自我を貫徹することが最も重要であり、この現実から数多くの作品が生まれた。ところが、父との和解（大正六年八月）に達したため、作品を生む力の源も衰退した。和解の実現直後、その喜びで『和解』を書くが、その翌年大正七年には作品が激減している。大正七年には『十一月三日午後の事』（この作品は大正七年十一月に執筆[1]、大正八年一月に『新潮』に掲載[2]され、同年四月、新潮社の「代表的名作選集」第三十三として刊行された『和解』に収録された）と『断片』（この作品はかなりの小品である）を書いただけである。『十一月三日午後の事』では、今までの傾向と比して視野がより広がり、主人公の自我を貫徹する考えよりも、他者[3]へのまなざしがより強く見られる[4]。

晩秋のある日、軍事演習での兵士たちの様子を見た「自分」の心の動きを中心に描いた作品が、『十一月三日午後の事』である。これは、主人公「自分」が自らの経験を書いたものである。冒頭で「晩秋」の「気持の悪い日」に訪ね

---

1 『志賀直哉全集』　第22巻

2 同書

3 「自分」以外のものを他者とする。

4 山田俊治は「他者のいないテクスト―『十一月三日午後の事』ノート」で、「他者として切り捨てたはずの上官にも、最後で「自分」は同化するのだった。／この同化の主題によって、テクストからは他者が消え、「自分」だけが残されることになるだろう。」と結論している。それに対して、本発表は異なった視点を提示しようとするものである。

て来た従弟と一緒に散歩がてら鴨を買いに出た「自分」は、道すがら演習中の兵隊に遭遇する。初めのうち「自分」は彼らの様子をあまり気にせず、「自分」の目的の鴨屋に向かって進んでいく。鴨が売り切れていたため「近所の仲間」の鴨屋に頼んでもらうまで、「自分」と従弟は「一町程先の利根の堤防」辺りへ行く。そこでまた演習中の兵隊たちに出会い、彼らの苦労している姿を目にしながらも「自分」はその光景から影響を受けず、こういった外の世界にあまり目を向けない。ところが、鴨を買った帰り道で倒れている「一年志願兵」の様子、そしてその後来る他の兵隊たちの惨めな状態を見て興奮し、「自分」の中に変化が起きるのを感じるのである。出かける前には「寒さに弱つた蜂」が暖かさを求めて「陽あたりのいい」部屋に入ってくるのを無造作に殺していた「自分」が、帰宅した後には本来食べるために買ってきた鴨が「半死になつてゐた」のを見て、食べるどころか「自分」の家においておくのもいやになり、他人に「殺して貰」って「他へ送つてや」ることになる。このように、作品の始めの頃と終わる頃の場面とでは「自分」の心理に大きな差が見られる。

従来、『十一月三日午後の事』について最も盛んに行なわれてきた解釈の背景には、発表当時に和辻哲郎によって下された評価[5]がある。和辻の評価には、反軍国主義という解釈と作品における写実的な描写の強調が見られる。これに

---

[5] 和辻は、「午後の散歩に鴨を買ひに行つて、演習中の兵隊を見るといふ極く短いスケッチですが、写実といふこともこれほど対象を生かし得れば何とも云へず深い味が出てくると思ひます。過度の行軍のために兵隊が幾人も死にかかつてゐる—それがたゞ見たまゝに描かれてゐるのです。主人公はたゞ「変な気がした」り、顔をそむけたり、涙ぐんだり、興奮して「何しろ明らか過ぎる事だ」と思つたりするだけです。そのくせそこにはこの明らか過ぎる害悪が—軍国主義や戦争や国家的利己主義や無知な圧制と屈従や、およそ目前の人類を苦しめてゐる馬鹿々々しい誤謬の一切が、赤裸にして横たへてあるのです。（中略）いかに写実的な芸術も、その写実が深く行けば行くほど象徴的な意義を発揮するといふ例は、この短篇によつて明らかに示されてゐると思ひます。」と評している。（和辻哲郎「電車の中で（下）」）

対し、正宗白鳥の「志賀氏のこの小品が、当時迎えられたのは、そこに「人道主義」「非軍国主義」の感情思想が現れてゐるためであつた。（中略）私は、今度も愛読した。しかし、和辻といふ人などの感服したやうな非軍国主義の現れに感心したのではない。軍国主義の非難は、談何ぞ容易ならんやと思ふ。小説家が秋のそゞろ歩きに二三の兵士の労苦を見て感傷的感慨を起こしたくらゐで、国家の大事が極められるものではない。」[6]という論評がある。彼は和辻の評価に言及しつつも意見を異にしている。

二人の評価はそれぞれ、本作品が反軍国主義をモチーフとしているかどうかを問題としている。これらの評価はその後、本作品の研究において多くの研究者の注意を引き[7]、先行研究においては作者の実年譜と作品の読みを直結するものが多い[8]。「一年志願兵」の様子を目にした後の「自分」の心理的な葛藤を理解するために、志賀直哉の実生活における一年志願兵との関わりについて考えるのは勿論意味があるだろう。しかし、そればかりを意識するのではなく、作中における他の諸要素をも考えに入れ、より『十一月三日午後の事』の作品の内容に沿って論じる必要があると考える。

先の二人のほかにも〈反軍国主義〉という主題は、しばしば議論となっている[9]。その他に、〈鴨と兵隊の描写を二重写し〉として捉える点[10]、さらに〈定

---

6 正宗白鳥「志賀直哉と葛西善蔵」（『正宗白鳥全集』第20巻）

7 山田俊治が「他者のいないテクスト―『十一月三日午後の事』ノート」の冒頭において指摘している。

8 遠藤祐「志賀直哉「十一月三日午後の事」他」、松本修「「十一月三日午後の事」小論」などがある。

9 松本修、山田俊治などの論文があげられる。

10 松本修は、「羽交いの半死の鴨はそのまま死にかけた兵士たちとオーヴァーラップする。あまりの惨状を見た「自分」は鴨を池に放して蘇生させようとするがうまくいかず、「重ね〳〵不愉快」になってしまうのである。ここでの兵士の描写と鴨の描写はそれ自体、二つの出来事の系列の相互浸透を示している」と指摘している。

稿と草稿の差〉[11]が、よく取り上げられてきた論題である。定稿において「自分」の心理がどうなっているかが明確になっていない部分は、草稿を参考にすると明解に理解できることがある。例えば、「自分」と従弟が利根の堤防辺りを散歩している時演習中の兵隊たちに出会い、彼らの苦労している姿を目にする。その時「自分」の心理がどのようであるかは作中では明確に表現されていないが、草稿では「自分」たちが「晴々しい気持になつてゐた」とはっきりと描かれている。

前述したように作品の始め頃と終わり頃の「自分」の心理にある差は、いうまでもなくその間に出会った出来事によるものであろう。そのため、「自分」が外出する直前の状況や外出中の出来事について考える必要がある。この作品における「反軍国主義」という視点の有無に関する発表当時の評価や先行研究における言及を確認するのは、本作品を論じる際に無意味ではないであろう。そこで本稿では、まずこの点について考える。そして、外出前の不快な天気や気に障る蜂などという外界の刺激に注目する。次に、鴨を手に入れる前後に軍隊の演習を見かけた時の「自分」の心理について分析する。その後「一年志願兵」の惨めな状態に遭遇し、さらにその後に来る兵隊たちを目にして彼らの様子に影響される「自分」の心理を明らかにすることによって、本作品における他者について検討を行いたい。

2 「反軍国主義」という視点

松本修は、「志賀直哉は、内村鑑三の思想的影響から、軍隊に対する嫌悪感を持っていた。（中略）「十一月三日午後の事」の中にも軍隊という制度に対する批判的言辞があることから、この作品自体を、志賀のアンティミリタリズムの思想が表明されたものとして捉える見方が支配的であった」という。また、山田俊治は、軍国主義批判を論じる上で、「この短編テクストは、ある一つの

---

[11] 山田俊治、松本修、沼沢和子「中期短編作品の問題―「十一月三日午後の事」の位置―」などがある。

読解の下に読み取られてきた。その読解とは、すでに同時代評の中にある。（中略）この読解は、後年、正宗白鳥によって（中略）否定されるのだが、戦後の研究史は、むしろ和辻的な読解を唯一の読みとして、この短編を作家論的な文脈に位置付けようとしてきたのである。」と要約している。以下、作家の実生活に位置する〈軍国主義〉に関する思想を考えるために、志賀直哉の未定稿や日記を見てみよう。

自分は自分の国を愛する点で、人後に落ちないつもりであるが、近頃のやうな世相の中では愛国者と自ら名乗る事は、寧ろ穢らはしい感じさへする。命を惜しまず戦争する事が、或は無ㄱの民をして戦争せしむる事だけが愛国者であるやうに考へ、その結果、日本はどうなるかといふ事に対し、全く無智なのは、誠に恐ろしい事である（中略）近頃の所謂軍部といふものの威張りやうは甚だ不愉快だ。日清、日露、両役の前後にも軍人は威張つたが、子供らしい無邪気な所があつた。一般の考へも今とは異なつてゐたから、威張つても不服を感ずる者は少なかつた、所が今度の場合ではそれが変に人をおどしてかゝる、（未定稿 219[12]）

作者の「反軍国主義」的な考え方、特にそれ以前と比べてたちの悪くなった軍部に対する批判が強調されている。

国際聯盟に対する日本政府の態度の如き、如何に愚劣さを暴露してゐるか、日本が本統に正しければかういふ結果には決してならぬ、馳引き、強がりのやり損なひである。軍部なるものが日本の国内の輿論を支配したやうに世界の輿論を支配出来ると思つた事が間違ひである、（未定稿 221[13]）

---

12 『志賀直哉全集』補巻 2

13 同書

周知のように日本は国際聯盟から脱退しており、それに対する非常な批判が見られる。

兵役といふ野蛮な体刑を受けるのは受ける人の間抜けだといふ気さえする、どんな偽りを以つてしても免れなければ己れを反つてあざむく事なのだと思ふ、伊吾(ママ)も然したいがい免かれるだらう、（日記、大正二年七月二十三日[14]）

たしかに、志賀直哉の日記や未定稿の記述を頭に置きながら『十一月三日午後の事』を読むのなら、作品世界に見られる兵隊の惨状の描写やそれに対する「自分」らの反応は、いかにも反軍国主義的な思想が表現されたものといえる[15]。が、作家の実生活と離れて考えればやや別の視点で読むことができるだろう。作品全体として、その背景に「反軍国主義」的な考え方があることは否定すべくもないが、それがこの作品の主題であったとは限らないと考える。

作家論的な文脈を離れ作品に沿って検討する（本稿4.）と、先行研究で紹介した和辻哲郎の言うような「軍国主義や戦争や国家的利己主義や無知な圧制と屈従」といった大きな視点よりも、もっと根本的なレベル、人間の感性で直観することのできるレベルの視点で、この作品が書かれたのではないだろうかという問題意識を持ちつつ、以下に分析を行ないたい。

3. 他者との関わり

3.1 外界の刺激との関わり—天気や蜂の描写を中心に—

---

14 『志賀直哉全集』第12巻

15 これらの言及（特に未定稿）は作品が書かれた後の時期になる。そのため本作品と関連付けることは出来ないのではないか。

作品の始めの五分の一ほどをざっと見るだけで、冒頭の「晩秋」「南風」に連なる表現、つまり、「肌はじめ／＼」「七十三度」「蒸す」「汗」などが数多く見られることに気付く。天気と直接関わるこのような描写は「自分」のその時の気分とどう関わっているだろうか。作品では「晩秋には珍しく南風が吹いて、妙に頭は重く、肌はじめ／＼と気持の悪い日だつた。」と記述されているのだが、草稿のこの場面と見比べると、そこには一致しない点が見出される。「寝不足だつた。その上秋にしては珍しく南風の吹く日だつた」という草稿の記述によって考えるなら、「自分」が「頭は重く」また「気持の悪い日」だと感じるのは、「寝不足」が原因だったかもしれないと思われる。が、作中の従弟との対話、「「今日は七十三度だよ」／「七十三度といふと、どうなんです」／「今頃七十三度は暑いぢゃないか。一寸した山なら夏の盛だ」／「それに蒸すんですよ。蒸すからこんなに頭が変なんですよ」そう従兄の方で説明した」に基づけば、「頭は重く」なることや「気持の悪い日」であることは、蒸し暑さが原因だという可能性が高くなる。また、定稿から削除された「寝不足」の原因については明確に判断できないが、そのような天気を頭に置いて読むなら、「寝不足」もその蒸し暑い天気のせいではなかろうかと考えられる。いずれにせよ、「自分」が気持ちの悪い環境に取り囲まれて不快な気分になっていることは明らかである。

このような日に「自分は座敷で独り寝ころんで旅行案内を見て居た。さし当たり実行の的もなかつたが、空想だけでも、かう云ふ日には一種の清涼剤になる。」また、従弟が訪ねて来た時も「二人は旅行の話を」する。このように、旅行の話でさえも「自分」の気持ちを左右する力を持っており、旅行はたとえ「空想」であっても、「自分」にとって快い世界への脱出の手段となっているようである。

ところが、その旅行は今すぐには実現できないので、その代わりに散歩しようと思いついたのではないだろうか。いわば、「自分」が快い世界を味わうために散歩に出かけたといえよう。「自分」が散歩中出会う不愉快な出来事つまり兵隊たちの様子に最初あまり注意を払わないのは、「自分」が快い世界に

逃れるため散歩に出かけたことと無関係ではないだろう。

以上に見てきたように、天気は「自分」の気持ちや行動を左右する重要な要素として描かれており、旅行は快さを求める気持ちを満足させる重要な方法になっている。

天気の描写と並んで蜂をたたく描写も、作品の始め頃の「自分」の気分を表す情景として読み取れよう。

蜂が四五匹、鈍いなりに羽音を立てて其辺を飛び廻つた。毎年今頃になると寒さに弱つた蜂が陽あたりのいい此部屋の天井へ来て集まる。今年は子供がそれを手づかまへにしかねないので、気がつくと蠅たたきで殺して居た。で、今も自分は従弟と話しながらそれ等を殺しては捨てて居た。

ためらうことなく次々と蜂を殺す「自分」は、「子供がそれを手づかま」えるかもしれないということがその理由だと認識しているようだが、傍線部の「今も自分は従弟と話しながらそれ等を殺しては捨てて居た」が注意を引く。子供が蜂を「手づかまへにし」ないようにするには蜂を殺す以外の方法もあったはずであるのに、「自分」はそれをあまり考えることもしていない。従弟と話しながら「殺しては捨てて居た」という行動から、他の生き物の命を全く気にかけない「自分」の態度を推察することが出来よう。

以上に見たように、散歩に出かける前の「自分」は子供以外の他者に目を向けておらず、気持ちが内向しているといえよう。

3.2 周囲の人物との関わり—従弟や妻を中心に—

作中、従弟は主に二つの場面で「自分」の行動に決定的な影響を与えるほどの役割を果たしている。まず一つ目は「自分」を訪ねてきた時で、「自分」は「さし当たり実行の的もなかつた」のに旅行案内を見ていて、かつ「眠れたら眠る心算で居た」。

（前略）根戸に居る従弟が訪ねて来た。（中略）従弟は庭に溢れてゐる井戸で足を洗ひながら、「今日大分大砲の音がしましたね」と云つた。／「あつちの方に聴こえたね。小金ヶ原あたりかしら」／「演習がもう始まつたんだな。昨日停車場へ行つたら馬が沢山来てゐた」／従弟は足を拭いて上がつて来た。二人は椅子の部屋に来た。（中略）「久しぶりで散歩でもしようか」／「しよう」／「柴崎に鴨を買ひに行かうか」／「いいでせう」。

すなわちその時の「自分」は、従弟が訪ねてこなければ外出することにはしなかったに違いない。が、後に出て来る外出直前の「町のお使はどうするの？」という妻の言葉から分かるように、「町のお使」のため出かけなければならなかった可能性は否定できない。ただし、おそらくその外出は時間や気分と関係なく行かねばならない単なる一つの用事であり、「自分」にとって快い世界への脱出にはならなかったであろう。

二つ目は、鴨を買う際に鴨屋の主が鴨を殺そうとしているのに「自分」があまり気にしないでいるのを、従弟に注意されて止めさせた場面である（詳細は以下 4.1）。鴨屋の主が鴨を殺していたら、帰宅した後の鴨が半死になっている場面に対する「自分」の心理や、「自分」が鴨を自分自身で殺したり食べたりする気になれなかった場面もなかったはずである。もしこの二つの場面で従弟の関与がなければ、話の流れが大いに変わっていた可能性がある。このように、散歩に出かけることであれ鴨を手に入れる場面であれ、従弟は「自分」の行動を導き出す重要な相手として描かれている。

一方妻については二つの場面、外出前と帰宅後にのみ描写がある。外出前の描写に注目すると、「「自分は妻に財布とハンケチを出さした。妻は、／「町のお使は如何するの？其鴨は今晩は駄目なの？」と云つた。／「今晩は駄目だ」」ここに見られるように妻に対する「自分」の応え方はつっけんどんである。従弟への応え方と対照的に、あまり好意的でない返事の仕方である。従弟が来るまでは妻についての描写は全くなく、「自分」が外出する時に突然登

場するので、従弟と外出する前までの「自分」と妻の関係はどのようなものであるか分からない。が、外出する時は、ただ「財布とハンケチを出さ」せるために妻を呼ぶ。妻の「町のお使」という言葉に対してはひと言も返事をせず、簡単にその鴨は「今晩は駄目だ」とだけ言う。なぜ「自分」が妻の質問に対して丁寧に答えなかったのかは作中から読み取れないが、どちらかと言えば、「町のお使」の質問を「自分」が好まなかったという印象を受ける。3.1に見たように、「自分」を取り囲む不快な環境から逃れようと外出しようとしている折には、妻のその質問はおそらく気に障ったのではないだろうか。

また帰宅後の場面は、以下のように描かれている。

「おや、お父様が鴨を買つていらした。とうとよ」こんな事をいつて妻が小さい女の子を抱いて出て来た。／「見るんぢゃない。彼方へ行つて……」自分は何といふ事なし不機嫌に云つた。

妻に対するこの発言は、「小さい女の子」に死にかかった鴨のもがく様子を見せたくない、という気持ち、すなわち子供に対する思いやりのためだと感じられるが、「自分」のその「不機嫌」な応え方をその子はどのように受け取っただろうか。3.1の蜂を殺す場面での「今年は子供がそれを手づかまへにしかねない」から理解されるように、その子は手でものを捕まえるほど成長していたと考えられる。ということは、父である「自分」の顔の表情が全く読み取れないことはないだろう。そのため、「自分」はうっかりと不機嫌な様子で、子供の心に何か影響を与えたかも知れない。おそらく「自分」の実子である「小さい女の子」に「自分」のその反応の仕方がどのように影響するかを考えずに、一瞬、その子がまるで関係ない者であるごとく、「自分」が扱っているかのようである。「自分」が外出中どのような状況に直面したかを知る由もない妻が暖かい心で出迎えようとその子を連れて出て来たのに、このように「自分」の反応はとても冷たい。妻に対する「自分」のその反応は外出中起こった

心理的な混乱のためだといえるが、外出する時の態度を合わせて見ると、妻に対する「自分」の答え方は、いつもつっけんどんであるといえよう。

以上に見てきたように、「自分」の気が向くような方向に物事を進める従弟は「自分」の重要な相手として描かれているのに対して、妻の場合は暖かさを感じさせる場面が作中には見られない。同じ他者であっても従弟と妻の扱いは異なっており、「自分」の気が向くことについては他者の関与に積極的に応じるのに対して、「自分」の気が進まないことについては意見さえ、つまりちょっとした干渉さえも許さない態度が読み取れるといえよう。

4. 他者に目を向ける「自分」

1. に述べたように、「一年志願兵」の状況を目にする前の「自分」の兵隊に対するまなざしには、ほとんど暖かみが感じられない。それまで「自分」は兵隊をあまり意識しないが、その後は彼らの状況に影響を受け、心理的な変化を見せる。それ故、「一年志願兵」の状況を目にしたことは重要な意味を持っている。以下、「一年志願兵」を目にする前と後の「自分」を見比べることによって、兵隊に対する「自分」のまなざしについて考えることにする。

4.1 「一年志願兵」に遭遇する前

外出前の「自分」の心理は外出後どのように変化するのだろうか。外出直後には兵隊をどのように見ているのかを、まず検討したい。

成田線の踏切を越して行く騎兵の一隊が遠く見えた。皆帽子に白い布を巻いて居た。／暫くして自分達も其踏切を越した。すると今度は後から歩兵の一隊が来た。其時それはかなり遠かつた。二人は余り注意もせずに話しながら来たが、其一隊は寧ろ案外な早さで、間もなく自分達の直ぐ背後に迫つて来た。／「屹度敵を追ひかけて居るんですよ」と従弟が云つた。／此蒸暑いのに皆外套を着て居る。幾ら暑くてもそれは命令で勝手には脱

げないらしい。帽子だけは皆手に持つて居た。それには矢張り白い布が巻いてあつた。

以上のように、「自分」たちは演習中の兵隊と出会っても、特別な反応を示していない。遠くから「歩兵の一隊が来」るのを見て「余り注意もせず」話しながら歩いており、「寧ろ案外な早さで」すぐ「自分」たちの「背後に迫つて来た」時の従弟の言及にも何も反応せず、兵隊たちの外観の観察を述べるだけである。その一隊に「余り注意も」しないのは、それらの兵隊にあまり興味がないように見えるとともに、「自分」は不愉快な世界から逃れようと出かけて来たため、自身の外の不快な世界あるいは気分転換にならない他者に、あまり注意を払う気がないのであろうと理解できよう。

蒸し風呂から出て来た人のやうな汗の玉が皆の顔に流れて居る。そして全く黙り込んで、只急ぐ。汗と革類とから来る変な悪臭が一緒について行つた。／十二三間長さの其隊は間もなく自分等を追ひ抜いて往つた。一足遅れに行く或一人の疲れ切つた後姿を見ながら、従弟は、／「何だか色んな物がちつとも身体について居ないのね。もう少し具合よく作れさうなものだ」と云つた（中略）兵隊は遠ざかつて行つた。往来には常になく新しい馬糞が沢山落ち散つて居た。（波線や二重線は論者による、以下も同様。）

以前、通り過ぎた一隊に「余り注意も」しなかった「自分」は、この段階で兵隊の様子やその周りの状態をより細かく観察している。しかし、傍線部の厳しい暑さに苦しんでいる兵隊らの様子に対する「自分」の特別な反応はなく、ただ、見たままの事実に従って波線部のような観察と描写を行なう。ここでは「自分」の心理的な状態は明らかにされていない。「疲れ切つた」兵隊に対する、二重線部のような従弟の発言に対しても特に何も感想を述べておらず、そ

の事実の叙述に徹している。この段階ではまだ兵隊の状態に心を向けているとはいえず、他者に対する「自分」の心理は明確ではない。

（前略）目的の鴨屋へ行つた。／鴨は一羽もなかつた。（中略）近所の仲間には鴨もある筈だといふので、自分は矢張りそれを頼んだ。二人は主がそれを取つて来る間、一町程先の利根の堤防へ行つて見た。（中略）同じ堤防の上を此方へ向かつて二十騎程の騎兵が早足で来る。そして間もなく銃声は止んだ。二人は堤防を下りて引返して来た。／彼方の四つ角で地図を持つた士官が二三人の兵隊と何か大声で道の事を訊いて居た。小さい田一つへだてた鴨屋の婆さんが矢張り大きい声でそれに返事をして居た。士官と兵隊とは急いで教えられた方へ入つて行つた。

「自分」は鴨屋の主が近所の仲間に鴨を取りに行く間の待ち時間に、二人でさらに足を伸ばすことにする。ここでも演習中の兵隊たちに出会うが、彼らの状況に心を動かされることなく、傍観者としての立場が貫かれている。「彼方の四つ角」にいる士官と「田一つへだてた鴨屋の婆さん」が互いに大声で話している場面は遠景描写のようであり、この場面には「自分」たちの存在は全く感じられない。そこにも「自分」の傍観者[16]としての立場が表されており、「自分」と他者の間に距離があることが感じられる。

利根川辺りから鴨屋へ戻った「自分」の心理は、その後以下のように揺れ動く。

---

[16] 草稿をこの場合に参考にすれば、「三人程兵隊を連れた士官が四つ角に立つて此方を向いて何か大声で訊いてゐた。聴きかへすと、／「青山へ行くのは此道ですか」と云つた。／「知りません」と自分は答へた。」（草稿）。やはり「自分」は傍観者の態度を維持しており、兵隊たちと出来るだけ関わりたくないという印象を受ける。また、定稿からこの場面を意図的に削除していることは、さらにその印象を強める。

自分達が其四つ角まで来た時に青くびの鴨を一羽、羽交で下げた主と出会つた。自分は其鴨の無邪気な突きだしてゐる顔を見ると今二三分の間に殺して了ふのが不快(いや)になつた。食ふ為に買ひに来て、余り面白くもない餌飼ひの鴨を持つて帰るのも考へ物だと思つたが、兎に角殺さずに持つて帰る事にした。／鴨屋へ来ると主はそれを持つて土間を抜けて裏へ廻つた。殺す気かしらと一寸思つた。そして少しいやな気をしながら、殺して来たら殺したでもいいと云ふ気を漠然持つた。すると、／「殺しに行つたんぢやないんですか」と従弟が注意した。で、自分も／「おい／＼殺すんぢやないよ」と大声で主に注意した。／「此儘お持ちになりますか」主はひねりかけた其手つきのまま、土間へ入つて来た。／鴨はあばれもしなければ、鳴きもしなかつた。自分達はそれを風呂敷に包んで貰つて、其処を出た。

波線部のように、鴨屋へ戻って来た時「鴨の無邪気な」顔を見てその鴨が直ちに殺されてしまうのが「不快(いや)にな」るが、傍線部に見られるように、主がその鴨を殺そうとするのに対して「自分」はただ「少しいやな気を」したものの、自身でそれを止めさせようとはしない。少し前には、殺してしまうのがいやになって、食べるのに「余り面白くもない餌飼ひ」のその鴨を「殺さずに持つて帰る事に」と思っていたのに、「殺して来たら殺したでもいい」と考えているのである。本論3.の3.1に見た蜂の場面で、晩秋に「寒さに弱」くて、生き延びるために「陽あたりのいい此部屋の天井へ来て集ま」っていた蜂を殺す場合は、「子供がそれを手づかま」えるかもしれないという理由はあるが、餌飼いの鴨をその場で殺させる理由は何もない。にもかかわらず、「殺して来たら殺したでもいい」と考えているのは、蜂に対してと同じように、やはり鴨の命に対しても「自分」の関心はほとんどないからであろうか。しかし二重線部のように、「自分」は従弟の関与で鴨が殺されるのを止めさせることにする。従弟のひと言がなければ、鴨も蜂のように簡単に殺されていただろう。このように主は鴨の命を取ろうとする者で従弟はその鴨の命を助ける者としてあるの

に対し、「自分」の態度はあいまいである。鴨の命は人任せであり、命に対する「自分」の関心の低さを表しているといえよう。

つづいて、鴨屋を出た直後、兵隊たちに出会った「自分」の気分を探って見よう。

（前略）五間程先の道端に上半身裸体にされた兵隊が仰向けに背嚢に倚りかかつて寝てゐた。一人が看護して居る。胸にハンケチを当てて、それに水筒から水をたらして居た。病人は意識も不確らしく眼をつぶつた儘、力なく口を開けて居た。其癖顔だけは汗ばんでかなりに赤い。変な気がした。立ち止まつて見るのがいやだつた。

「あばれもしなければ、鳴きもしな」い鴨とほぼ同じような状態に見える兵隊の惨状を目にして、「自分」は「変な気がした」り「立ち止まつて見るのがいや」になったりする。以上の傍線部を一読すれば、「いや」であるのは兵隊のその状況に同情したためであると思われる。が、外出直後や利根川辺りから帰る時の「自分」のまるで傍観者のような態度を考え合わせれば、「自分」の「変な気が」したり、また「見るのがいや」だったりしたのはいわゆる同情のせいと思われるだろうか。ここで前述の鴨屋へ戻った時の場面に注目すると、「…**不快**（いや）になつた。」と「少し**いや**な気…」に注意を引かれる。それら二つの「イヤ」と「立ち止まつて見るのがいや」の「イヤ」に類似性はあるだろうか。鴨の「無邪気な」顔を目にして「**不快**（いや）になつた」のは瞬間的な同情といえよう。その次の、「**いや**な気」とは、「他者」に何か惨めなことが起こるのを見て心が動かされるが、「自分」は全く関わりのない者として相手と距離を置こうとしている時の後ろめたい気分である。それに対し、倒れていた兵隊を見た時の「イヤ」は、その惨状を見て「自分」が不愉快な気分になってしまうのを避けたいため「立ち止まつて見」たくないという気持ち、つまり自分を不愉快から守りたいという気持ちがあるといえるのではないだろうか。

以上に見てきたように、「一年志願兵」に出会う前までの「自分」は他者に対して基本的に関わりたくないという気持ちが強く、また不愉快なものから自分を守ろうとする態度があり、他者に対するまなざしはまだほとんど見られない。

4.2「一年志願兵」に遭遇した後

急ぎ足の隊は其処で一寸さへぎられると後から／＼人が溜りかけた。／「止まつちやいかん」と士官が大きい声で云つた。流れの水が石で分かれるやうに人々は其処で二つに分れて過ぎた。人々の眼は倒れた人を見た。然し黙つてゐる。皆は見ながら黙つて急ぐ。／「おい起て。起たんか」頭の所に立つてゐた伍長が怒鳴つた。一人が腕を持つて引き起さうとした。伍長は続け様に怒鳴つた。倒れた人は起きようとした。俯伏しに延び切つた身体を縮めて一寸腰の所を高くした。然しもう力はなかつた。直ぐたわいなくつぶれて了ふ。二三度其動作を繰り返した。芝居で殺された奴が俯伏しになつた場合よくさう云ふ動作をする。それが一寸不快（ふかい）に自分の頭に映つた。倒れた人は一年志願兵だつた。他の兵隊から見ると背も低く弱さうだつた。「これは駄目だ。物を去つてやれ」と士官が云つた。踏切番人のかみさんが手桶に水をくんで急いで来た。自分はそれ以上見られなかつた。何か狂暴に近い気持が起こつて来た。そして涙が出て来た。

最初「自分」は、「倒れた」兵隊の苦しそうな動作を見て「芝居で殺され」る場面を思い出し、「一寸不快に」感じる。先に見たように、これ以前にも「自分」は、「上半身裸体に」され「力なく口を開けて居た」兵隊の状況に対して、「変な気がした」り「立ち止まつて見るのがいやだつた」りしたことがあった。ところが上記傍線部のようにその兵隊が「一年志願兵だ」と認識した後は、その惨めな状況にだんだん圧倒されていき、「狂暴に近い気持が起こ」

ったり「涙が出」たりする。なぜ、以前あまり兵隊たちの様子に注意もしていなかった「自分」が、だんだん他者である「一年志願兵」の状況に引き込まれて行くのだろうか。よりよく理解するために「一年志願兵」とは何か知る必要があるだろう。

「一年志願兵」とは「徴兵令中に一年服役を認めた制度」[17]で、明治十六年の改正徴兵令で基礎が作られた。[18]そして、明治二十二年の改正法において「予後備役幹部養成制度なることを明らかにして」[19]確立された。それは、「満十七歳以上満二十六歳以下」で、中学校以上の学校を卒業の学歴を持つ者が対象で「『服役中食料被服装具等ノ費用ヲ自弁スル者ハ、(中略)一箇年間陸軍現役(中略)ニ服セシム』」[20]というものであった。このことから分かるように、「一年志願兵」は一般の兵隊とかなり異なり、より年下の可能性が高く、また相当に経済的に豊かな家族の出身者であるといえよう。作中に出て来る「一年志願兵」もおそらく他の兵隊と比べて年若く、また経済的に豊かな背景を持つ者であると考えられる。

作者志賀直哉は、その日記において、「一年志願兵」の経験について言及している。

午后、山内と房吉が帰るのを、軍服に着かへて見送る時は少しイヤな気がした。(日記、明治四十三年十二月一日[21])
朝軍医に面会を求め事情を聞いてくれといふとそれは聞くまいといつて、兎も角君のカラダは一年志願兵には適せんやうだナとこんな事をいふ、／午后、中隊長が来て「君は除役になつたから」といふ。もうどうする事も

---

17 『国史大辞典』 第1巻

18 松下芳男『明治軍制史論』 p. 120

19 同書 p. 141

20 同書 p. 142

21 『志賀直哉全集』 第12巻

できぬ、／あとで独りで壁をスリ歩いた。（日記、明治四十三年十二月三日[22]）

志願兵だけ外出をゆるされ帰京、両国で写真を撮る、／帰ると直ぐ皆集まつて呉れた、二時間もゐないで又両国へ行き帰営、（日記、明治四十三年十二月四日[23]）

ここから、ある時期の作者自身が「一年志願兵」を経験したことがわかる。したがって日記に記述されている経験が、作品の描写に反映されている可能性が考えられる。それ故他の一般の兵隊と比べて「一年志願兵」が作中の「自分」には親近感を感じる者であったという可能性が否定できないだろう。

また、作中においては、兵隊の演習を目にして「自分」の「中学時代に行つた行軍の話などを」する箇所がある。その内容は作品からは読み取れない。が、このような描写は確かに、「自分」の頭のどこかにその行軍や演習に関する多少の思い出があったことを明らかに示している。苦しんでいる「一年志願兵」が中学時代の「自分」と年齢が近いため、その苦しみがより現実味をもって感じられるようになり、傍観者のような立場を越えて「自分」自身がその「一年志願兵」の状況をあたかも体験しているかのようになったと考えられる。そのため、「狂暴に近い気持が起こ」ったり「涙が出」たりするのである。そしてそればかりでなく、「自分」がその状況にすっかり引き込まれてしまう。以下の引用は「自分」のその状態を表している。

小学校の前で従弟と別れた。そして夕方の畑道を急いで来た。自分は一人になると又興奮して来た。それは余りに明か過ぎる事だと思つた。それは早晩如何な人にもハッキリしないでは居ない事がらだ。何しろ明か過ぎる事だ、と思つた。総ては全く無知から来てゐるのだと思つた。／自分は

[22] 同書

[23] 同書

不知、道を間違へてゐた。まがる所をまがらずに来たのだ。子の神の入口まで行つて自家の方へ引きかへして来た。

「自分は一人になると」なぜ「興奮して来た」のか。そして、何が「明か過ぎる事」なのだろうか。蜂や鴨の命にあまり関心を持たなかったそれまでの「自分」は、命に関わるような「一年志願兵」の悲惨な状況を目の当たりにして心から動揺してしまい、そのため一人になると「興奮して来た」のである。以上の二重線部の「それは」の指すものは曖昧であるが、兵隊の扱い方に非人間的な面が現れているという意だと思われる。また「総ては全く無知から来てゐる」とは、作家論的な文脈から本作品を論じた沼沢和子[24]の言葉を借りれば、それは「日本の軍隊のあり方を〈無知〉」だという。が、『十一月三日午後の事』の作品自体に沿って考えてみると、氏が言うよりも、もっと根本的な思想、つまり人間が人間を苦しめているすべてのことが「明か過ぎる事」で、その「総ては全く無知から来てゐる」と考えられないだろうか。2.のまとめで述べたように、人間の感性で直観することのできるレベルの視点で、「自分」は他者の苦しみを捉えていると考えられる。上記や前述の引用を合わせて考えれば、命に関わるような状態にある「一年志願兵」や、それに対する伍長の扱い方に見られるひどく非人間的な側面が、「明か過ぎる事」であるという可能性が高い。

このように神経が高ぶった気分で帰宅した「自分」は、3.2の後半に記述したように妻の発言に対して「不機嫌」に反応したり、「半死になつ」ていた鴨を「出してその鴨の状況を見て重ね〳〵不愉快にな」ったりし、他人に「殺して貰」う。そして、それを「自家で食ふ気は」なくなって、翌日「他へ送つてや」る。このように、帰宅後の「自分」は心理的に混乱している様子が読み取れる。ところで、帰宅後の「不機嫌」である「自分」の気分は、一読したところ外出前の気分とあまり変わっていないのではないかという解釈もある

24『志賀直哉一冊の講座』

かも知れない。けれども、外出前と帰宅後の「自分」の行動に注目すれば、外出以前は蜂の命にいかにも無関心に蜂を殺していたのに対し、帰宅後は食べる目的で買ってきた鴨の半死になっている状態を見て、食べることはおろか、殺す気さえもなくしたほど大きな変化が生じている。というように、物語のはじめには自分一人の世界に閉じこもっていた「自分」が従弟によって外へ出るきっかけを得て、その後他者からの影響を受けまいとしつつも、ついに他者によって大きく動揺し、心理的に変化するに至る様子が描かれているのである。

憂鬱な環境から逃れるように外出した「自分」は「一年志願兵」に出会う前までにも様々な不快な状況に遭遇するが、ほとんど傍観者の立場を取って離れたところから観察するような態度を維持する。しかし、帰り道で「一年志願兵」の極限状態を目撃してそれに圧倒されてしまい、慣れた道をも迷ってしまう。外出前の「自分」と比べてみれば、帰宅する頃の「自分」は外界から来る様々な影響にひどく心を乱され、他者の状況に影響されざるを得なくなったといえよう。

5. おわりに

本稿ではまず、演習中の兵隊に遭遇する前の「自分」の心理を理解するために、「自分」の外出前に受けた外界の刺激との関わりに目を配った。そして、外出後に演習中の兵隊を目にすることで変化する「自分」の心の動きについて考えることによって、他者へのまなざしを探ろうとした。論考を他者との関わりと他者に目を向ける「自分」とに分けて展開し、他者へ目を向けるきっかけとなった「一年志願兵」をめぐる場面に主に注目した。

軍事演習に遭遇した「自分」の心の動きを中心に描いた『十一月三日午後の事』について本稿では、不快な環境から逃れようと外出した「自分」が、外出中様々な状況に出会って心理的にどのように変化していったかに焦点を当ててみた。本稿 3. で論じた他者との関わりでは、「自分」の気が進まない他者とはあまり関わりを持とうとせず、己の世界に閉じこもっているばかりであることを見た。「自分」のこのような気分が変わり始めたことが意識されて来る

のは「一年志願兵」の状況を目にした後になる。本稿4.で見たように、「一年志願兵」に出会うまでは演習中の他の兵隊たちの惨めな状況を目の当たりにしても特別な心理的変化は起きず、傍観者のような立場で観察するだけである。が、「一年志願兵」に出会った後その状況に引き込まれていき、最終的に、「他者」に心を向けざるを得なくなることを明らかにした。

おおむね作者志賀直哉の反軍国主義という視点で読まれてきた『十一月三日午後の事』は、作家論的な文脈を離れて作品世界を中心に検討してみると、それまでには見えなかった面すなわち心理的な側面が現れてくると考える。本作品を「他者」へのまなざしという視点で読むことに意義があるのはそのためである。

<参考文献>

単行本

1. 須藤松雄『志賀直哉の文学』 近代の文学7 桜楓社、1963年
2. 『志賀直哉全集』「月報五」 第3巻（附録） 岩波書店、 1973年
3. 松下芳男『明治軍制史論』 国書刊行会、 1973年
4. 『国史大辞典』 第1巻 吉川弘文館 1979年
5. 『正宗白鳥全集』 第20巻 評論2 福武書店 1983年
6. 『志賀直哉全集』 第3巻、12巻 岩波書店 1999年
7. 『志賀直哉全集』 第22巻、補巻1、2、3 岩波書店 2001年

雑誌／新聞記事

1. 和辻哲郎(1919)「電車の中で（下）」『読売新聞』，1月9日
2. 沼沢和子(1982)「中期短編作品の問題―「十一月三日午後の事」の位置―」『志賀直哉 一冊の講座』 日本の近代文学3 有精堂、 pp. 101-112
3. 遠藤祐(1984)「志賀直哉「十一月三日午後の事」他」 『国語教材研究講座』高等学校現代文〈上巻〉有精堂、pp. 57-70
4. 奥野忠昭(1985)「構造把握を中心とした教材研究―「十一月三日午後の

事」（志賀直哉）の場合―」『和歌山大学教育学部紀要―教育科学―』、34巻、 pp. 63-74

5. 篠沢秀夫(1996)「志賀直哉『十一月三日午後の事』をめぐって―文体学の方法論―」『国語国文論集』 学習院女子短期大学国語国文学会、25号、pp. 14-17

6. 松本修(1996)「「十一月三日午後の事」小論」 『宇大国語論究』、8巻、pp. 57-73

7. 山田俊治(2003)「他者のいないテクスト―『十一月三日午後の事』ノート」『解釈と鑑賞　特集・二十一世紀の志賀直哉』、68－8 号 867 巻、pp. 164-170

8. 松井貴子(2006)「志賀直哉のまなざし―母から妻へ、そして、自己から他者へ」 『宇都宮大学国際学部研究論集』、22巻、 pp. 23-36